

源氏物語を読むために――三矢先生を偲んで――

杉浦俊治

源氏物語を読むために―三矢先生を偲んで―

杉浦俊治

〈目次〉

はじめに 一

- 一 「源氏物語全講会」の歩み―三矢先生から折口先生、そして岡野先生へ
三矢先生と國學院と源氏物語 三矢先生と折口先生 三矢先生の「源氏全講会」
明治期の源氏研究と三矢先生の思い 折口先生の源氏物語全講会
そして岡野先生による復興へ

- 二 「やまとだましひ」と源氏物語 九
三矢先生五十年祭 三矢先生が一番大切に考えていられたこと―「やまとだましひ」
「やまとだましひ」は日本人固有の根生いの心

- 三 私にとつての「國學」 一五
「学問の道」 「國學」とはどんな学問か 「國學」は文芸復興の学である「

- 四 「もののあはれ」を知る文学・源氏物語 一九
「やまとだましひ」と「もののあはれ」 本居宣長「もののあはれ論」
宣長の物語論 「人の実の情」こそ大事 宣長こそ源氏物語の最良の導き手

- 五 「もののあはれ」と「いろいろのみ」 二五
折口信夫の「いろいろのみ」 儒仏の道 新たなる「女性達の時代」に
「いろいろのみ」の本意から源氏を見る 谷崎潤一郎の「源氏ぎらい」

おわりに

はじめに

源氏物語全講会研究顧問などと大層な肩書がついておりますが、なに、毎回の全講会の時、岡野先生にお茶をさしあげているだけ、まあ、野球やサッカーの応援団の様なものがありますが、よく申します「門前の小僧」で、何となく源氏物語の匂い様なものが感じられてきて、よい気持ちになってきて居ります。

今日は鶴岡の皆様の誇る三矢先生を偲んで、源氏物語のお話を申し上げる機会を頂きましたこと、誠に光栄に存じますが、私如きがこの様な機会を頂きましたについては、三矢先生が私どもの大学の第一期の卒業生でいらつしやること、そのお弟子さんである折口先生が第十八期、その折口先生の最後の内弟子として折口先生におつかえしたのが第五十六期の岡野先生、そして師弟関係にはないのですが、と申しますのは、私は学生時代古典の勉強をしない不埒者でありましたが六十一期、三矢先生から六十年の末の後輩でありまして、五十年前この鶴岡の放送局に勤務していた、と云う御縁からでございます。

どれだけのお話ができますか心許ないのでありますが、しばらくお時間を頂きたいと存じます。

× × ×

一 「源氏物語全講会」の歩み／三矢先生から折口先生、そして岡野先生へ

只今申し上げました源氏物語全講会と申しますのは、三矢先生が大正十年におはじめになった源氏物語講座の称であります。源氏物語の講座は全国に幾つありますが、その数は知れませんが、この全の字のつくものは恐らくどこにもないだろうと存じます。

三矢先生のお志がこめられている様に存じます。

その辺につきましては追々に申し上げますが、七年計画で全部をとおはじめになったのですが、そのお志を達せられずに倒れられ、そのあとをお継ぎになった折口先生、又亡くなられて、現在、岡野先生が引き継いでいらつしやるのです。岡野先生の講義は、只今「野分」の巻の中程まで来て居ます。その前の「篝火」が九月で、季節びつたりというのは誠に良いものであります。

× × ×

三矢先生と國學院と源氏物語

三矢先生の卒業論文は「源氏物語の価値」という文法論でありました。この卒業論文が「口語文法の体系的な研究の嚆矢」となった明治三十二年の『国語の研究』となり、有名な『高等日本文法（明治四十一年）』として花開いた」（国語研究六十四号 諸橋美智夫）のがあります。

三矢先生は明治二十三年十九才で上京、その年開設された國學院に入学、その三年間にこの卒業論文をものせられます。現在、國學院大学の文学資料室に残されているその頁を開きますと、「日本文学史上第一等の作品なり、これがわが判定なり」と、一画一画、誠に勢のある筆づかいで判定して居られ、先生の気魄が今に感じられます。この論文を前にして私の感じたことは、これだけの論文が在学中の三年間で仕上げられるものであろうかと云うことでありました。

三矢先生は「在学中、かの高名な物集^{もずめたかみ}高見先生を教室で時に怒こらせ困らせていた」と、國學院同期の稲村眞里という方が語って居られます。物集先生と云えば、広文庫二十巻の物集博士です。よほどの自信がなければこういうことはできません。私どもにも覚えがあります、できの良い学生^{ひと}が、授業中しばしば、若い先生を困らせて楽しんでいました。自信にあふれた若き日の三矢先生のお姿が目には浮かぶ様であります。

稲村氏のお話からは、それがどんなものだったのか、細かい文法の問題だったのか、又、源氏物語の問題だったのかわかりませんが、とにかく、「あの物集先生に」と稲村氏を感心させて居られるのです。

三矢先生に

手すさびに母のものせし紅葉の賀

おし絵よりこそむつびそめけれ

と云うお歌があります。「三矢重松君伝（國學院三期鳥野幸次）」は幼少の頃の思い出と云っておられます。その「幼少」とはお幾つ位だったのか？ 紅葉の賀といえ、恐らくは、「青海波」の舞姿だっただろうと思います。鳥甲に常装束、下襲は青海の波の模様、袍には千鳥の模様、海の青の匂う様な光の君であつたろうと思います。もしかすると三矢家には、紅葉の賀の他にも色々なおし絵があつたのではないかと、お母様は源氏物語を声にして読んで居られたのではないかと、三矢先生の幼少時代、二百人町の三矢家には「源氏の風」が吹いていたのではないかと、とすれば、朝陽小学校時代はともかく、西田川中学の時には、三矢先生は源氏物語に親しんで居られたのではないかと想像するのです。

先日、TVの時代劇で、思う人の姿を写したおし絵を大切にする浪人が出てきました。そのおし絵のきれいだったこと、一瞬どきっとしたことでした。私の子供の頃、我が家にもおし絵がありました。それは歌舞伎役者のものでしたが、久しく忘れていたものを出したものでした。

「母がものせし紅葉の賀」が幼少の三矢先生に与えたものは大きかったに違いありません。鳥野氏は上京直後の三矢先生は「ためらいなく國學院を選んだ」と記して居られます。「他の人はみんな早稲田へ行ったが三矢君は」と書いて居られます。「ためらいなく」國學院を選ばれた三矢先生は、はっきりと國學院がどういう学校であるかを認識して居られたのだと思います。そして、この時「源氏物語」が三矢先生の身内に大きく育ってきていたと云えるような気がするのです。

三矢先生と折口先生

岡野弘彦先生は『折口信夫伝』（中央公論新社）の中で、大学を卒業して二年の折口先生が、「三ヶ月で万葉集全二十巻四千五百首を一気に口訳し終った。しかもこの口訳を続ける間じゅう、折口の机の上にはテキストとして使う『日本歌学全集 万葉集』だけしかなかった。この本は佐々木弘綱・佐々木信綱校註で、原文の横に片仮名で読みを附し、ごく稀に簡単な頭註を記した手軽な本である」と記し、又「三年の時に辞書『言海』を手に入れているが、これは折口にとつては引くためのものではなく、片っぱしから読むための本であった。また、^{たちはなちかげ}橘千蔭の『万葉集略解』は当時もっとも流布した万葉集全歌の簡明な註釈書であったが、これを筆写したり、自分の考えを書きこんだりしたという。國學院の学生の頃には、古本屋で索引の欠けた『国歌大観』を買い求めて、一夏蔵にこもって読み通し、『二十一代集の中では玉葉集と風雅集がいい』と兄の友人に語ったというのも、折口ならではの徹底した読書法の結果であった」

と述べて居られます。

さればこそ註釈書・参考書の類一冊もなしで、万葉集全四千五百首を、しかも口述筆記で完成させるという離れ業ができたわけで、すぐれたお方というものはすべてこうしたものでありましょう。

三矢先生も亦、國學院入学の時、すでにして源氏物語五十四帖は読んでしまつて居られたに違いないと思われてなりません。

三矢先生は「國學最後の人」と云われています。

「三矢重松は山形県鶴岡の士族の家の人で、いわゆる三矢文法を説いた人として知られているが、実は國學最後の人といわれるほど、明治の世にあつて國學の伝統と情熱をきびしく伝えていて、一見して古武士のように端正で激しさを感じさせる清冽な容貌が人の心をとらえた」『折口信夫伝』

その三矢先生と折口先生の出会について、同じ『折口信夫伝』で次のように語られて居ります。

「中学にからまる印象として、当時同校（天王寺中学）教諭三矢重松先生に口頭試問を受けた記憶が深く」

「折口が、この三矢教諭から中学入学のための口頭試問を受けて、強い印象を受けたというのは容易にうなずけることである。緊張した場で短く交される言葉だけに、平常の状態では想像もできないほど濃密で重いものが、言外にも、言葉そのものにも流露する。恐らく運命的な感銘を、折口は神秘的默契のように胸に刻んだに相違ない。このことが心の端緒となって、やがて國學院へ進学してのち、三矢教授との間に柳田国男に対するよりも更に深い、人間的な敬愛の深まりを持った師弟の縁が結ばれていくのである。」

折口の古代学を支えるものとして、深い古典の読みこみや、民俗学の知識の広く自在な応用、あるいは、その他の近代の学問の採用があることは勿論だが、いま一つ、江戸の國學、そして直接には三矢博士から受けた國學の伝統の志のあることを忘れてはならない。

折口の國學の師、三矢重松が世を去ったのは大正十二年七月十七日、享年五十三才だった。

死に顔の

あまり空しくなりいますに

涙かわきて

ひたぶるにあり

ますらをの命を見よ

と 物くはず

面わ かはりて

死にたまひけり

胃癌を病んだ國學者の死は壮烈であった。

だが、折口にはその死を悲しんでいる暇はなかった。翌十八日には、二度目の沖縄への民間伝承探訪旅行に発った。折口が同門の者と共に師の後を祭るのは、満一年の祭の時で、その祝詞が残っている。(中略) この後、折口は三年祭、五年祭、十年・二十年・二十五年・三十年などの祭事を営んだ。

三十年祭の祭文は昭和二十八年、没する年の夏、病苦に耐えながら作ったもので、短く力弱った文体にまざまざと身の衰えがにじんでいる。その前の二十五年祭は昭和二十二年に行われたが、祝詞にも敗戦後の悔いと國學再興の決意が示されている。

祭りを執り行う前日には、折口が三矢家にうかがって先生の奥様に挨拶し、祭場に据える先生の肖像画をお借りして、私が唐草模様の大風呂敷に包んで國學院に運んでくる。そういう時、先生の思い出を語り聞かせてくれる。柳田先生からは学恩を、三矢先生からは人間的により深い魂の薫育を受けたのだということが、折口の話から汲みとれるのである」

「三矢重松という人は、折口先生にとって、実に心こまやかでやわらかな、人間性に富んだ教育者であったようだ」

三矢先生と折口先生との関係はこのように深いものでありました。

三矢先生の「源氏全講会」

明治二十六年に國學院を卒業された三矢先生が母校の講師になられるのは卒業後八年の明治三十四年一月、教授になられたのは二十年後の大正九年、この間に明治三十三年には東京外国語学校講師、三十四年には東京高等師範学校講師・教授として、源氏物語・文法等の講座を担当せられて「三矢文法」を確立されるのですが、鳥野幸次氏によれば「その架中、源氏にあふれる」とあり、着々とその研究をおすすめになられたのですが、世の中の源氏物語を見る目は三矢先生の思いとは遠いものがありました。

大正五年（六年という説もありますが）、その思いが、あの鶴岡市の春日神社境内の碑にもある

あたひなき珠を抱きて知らざりし

たとひおぼゆる日の本の人

というお歌になって現れます。

「あの歌は先生が源氏の研究に脂の乗り出した頃のお作で、連作になって居ります。（中略）先生の歌集を見ますと、連作をしきりに作ってをられます。その中に源氏物語を詠んだと思はれる歌が、『あたひなき』の歌をはじめ、七首ばかり載ってをります。

二番目に

わりなしや 人こそ それを知らざらめ 知る人さへや ひそみ棄つべき

といふ歌があつて、何れも何を歌はれたか一寸はつきりしませんが、この歌は『全然何も知らない人が源氏の世界的価値といふものを認めてゐないのは尤もであるが、さうだからと言って、其源氏を理解した人までが、あの価値を黙って、いい訳がない』といふ意味の歌であります」『折口信夫伝』

これは、岡野先生が折口信夫伝に引用された折口先生の「三矢先生の学風」からの引用です。

この七首のお歌の頃でありましょうか、「和学講談のやうなものをおやりになつては何如ですか」と三矢先生におすすめした、と折口先生が云つて居られます。『折口信夫全集』十五卷「座談会」

和学講談がどんなものなのか、私にはわかりませんが、講談と云う事はかなり面白い語り、口のものだったと三田の方々も云つて居られるので、折口先生御自身和学講談風におやりになったのかも知れません。

× × ×

明治期の源氏研究と三矢先生の思い

伊賀敬二氏が「明治前半はまだ研究・注釈ともに目立つ業績はあらわれなかった」と有精堂出版の『源氏物語講座第八巻 源氏物語の研究史』の中で述べて居られます。

「末松謙澄の英訳源氏物語がロンドンで刊行されたのは一八八二年、坪内逍遙の小説神髓（一八八五・八六）で批評されたりして、源氏物語も次第に新しい時代の中に置かれるようになったが、明治前半はまだ研究・註釈ともに目立つ業績はあらわれなかった。又明治後半も、藤岡作太郎氏の國文学平安朝編（一九〇五）、与謝野晶子氏の新釈源氏物語（一九一二・一三）、五十嵐力氏の新國文学史（一九一二）——印象批評的鑑賞と自然主義・西欧文学の観点からする新しい方向を示した——武笠三氏有精堂文庫源氏物語（一九一四）は湖月抄の活字版と並んで広く利用された」と述べてをられて、明治の源氏物語は淋しい

環境の中にあつた事を伝えています。

本居宣長翁の亡くなったのが一八〇一年、末松謙澄氏が一八五五年生まれ、坪内逍遙博士一八五九年生まれですから、『紫文要領』『玉の小櫛』の昂まりを引き継ぐ人が出てもし議論はない様にも思うのですが、本居翁死後、その気配のないのが不思議の様に思えます。

伊賀氏の文中にある『小説神髓』はどんな批評をしているか見てみると、和歌や江戸時代の文学を厳しく否定する一方で、「本居大人曰く」として、『玉の小櫛』の一部を延々二頁以上引用（岩波文庫）した上で、「源氏物語は勸善懲惡、因果応報を否定した写真小説である」と高く評価しているのですが、これに続く「目立った動」はなかった様です。

「ザンギリ頭を叩いてみれば文明開化の音がする」と歌われ、初代文部大臣が日本語廃止をとなえ、鹿鳴館で毎夜、夜会や舞踏会が行われた時代、西洋列強に追いつく事に急だった時代。しかし、それゆえにその反省の空気も強かった時代は、源氏物語どころではなかったのでしょうか。「君死に給う事なかれ」と公然と歌われた時代は、昭和十年代に見られた様な皇室をはばかりるものも少なかったであろうと思われるのですが……。

とにかく、「あたひなきたま」と評価せられた三矢先生にとって、明治という時代は不本意な時代でありました。「これほどのものを日本人は何故大切にしないのか！」との思いが「あたひなき」や「わりなしや」のお歌になり、五年後の課外講座「源氏物語全講会」になるのです。

三矢先生は

「近代の学者の中では、誰よりも先に源氏物語に文学を発見し、大きな指導力をもって人に奨めた。源氏物語を認めたのは、國學者にして国文学者でありえたからで、平安朝の生活にも古代生活のひき続きがあると考え、そこに日本人のモラルとセンスを発見する糸口を見出していたからである。その矢先に体をいためてしまわれた。

結局、こういう点から三矢博士の源氏物語にかかわる意志を自分が受け継ぐのだという思いが折口には強かった」『折口信夫伝』と岡野先生は述べて居られます。就中、「平安朝の生活にも」から「糸口を見出していた」までは、三矢先生、折口先生にとって極めて大切なところなので、よくお考え頂きたいと思います。

源氏物語によせる三矢先生の思いを、鳥野氏は次の様に述べていられます。

「君は此の物語の心読者にして、而も亦人情の美を集めたる人なりき。かくて本書研究の為には資を惜しまず、其架中珍籍の集まるものに多く、此の間筆を執って校合又は挿註に勞し、漸次佳境に入れり。即ち大正十年には源氏物語全講会を國學院内に

起し、遍く有志の来聴を許して頗る盛況を呈せり。かくて第一年には紅葉の賀より濡標まで八巻を講じ、第二年には蓬生より初音までの九巻を了へ、後五年にして全部を講了せん豫定なりし。其第一周年に際して

長くとも後六年を事なくて 事なし果てん 神ちはひませ

と詠める歌にて知らるるなり。然るに神のちはひや至らざりけん。はたさるべき定めにやありけん。一此の事業も、その半にすら至らずして世を早うせしは痛嘆に堪へざるなり」

三矢先生のご無念の程が胸に響くのです。まさに「痛嘆に堪へざるなり」の思いを深くします。

岡野先生は『折口信夫伝』で、「胃癌を病んだ國學者の死は壮烈であつた」と述べて居られます。『折口信夫全集 ノート編』第十五巻の慶応義塾の人達との座談会（出席者折口信夫・小島政二郎・池田弥三郎・奥野信太郎・木々高太郎）で、折口先生は「先生が亡くなられたので、翌年御遺族から、つづけていけとおっしゃられたので、そのあとをさせて貰いました。そういうことがなかったら、万葉一つで、ずっと通してでしようね。だから、万葉と源氏の両刀使いみたいな一生になってしまいました」と、三矢先生の死が折口先生に源氏物語をもたらしたとおっしゃって居られます。

× × ×

折口先生の源氏物語全講会

源氏物語全講会は折口先生に引き継がれ、大正十三年から國學院で講ぜられたのですが、昭和三年、突然慶応義塾に移され、かの先の大戦中も続けられました。敗戦後の昭和二十三年に復活、昭和二十七年まで三田の演説館で講ぜられたのです。その内容は折口信夫全集の編集に当られた池田弥三郎氏・西村亨氏、内弟子として折口先生に仕えて居られた岡野先生によって記録されています。これが和学講談の雰囲気をもつものなのかどうか、文章だけでは想像することはできません。然し……。折口先生も亦病魔に魅入られて、全講会は再び中断します。

× × ×

そして岡野先生による復興へ

それから五十年。三矢家から折口先生に託されたという様なことはなく、五十年の才月が流れ去りました。三矢先生八十年・折口先生五十年祭を斎行し、記念の講演会を岡野先生が企画せられて、國學院の講堂で両先生をお偲び申し上げた平成十五年秋、岡野先生のお心に一つの決意が湧いて来られたのだと思います。これを機会に、三矢・折口両先生のお志を継がせて頂こうという思い、全講会を続けなさいという折口先生のおすめのお声を聞かれたのではないかと思います。と申しますのは、その二年前、平成十三年の春から、岡野先生の源氏物語講座ははじまっていたのです。春秋四回、國學院大学院友会館で講じて居られました。その時は全の字は使われていませんでした。源氏物語と取組むということは大変なことです。折口先生のお許し、おすめを頂くのに二年の時間を必要となさったということであろうと思います。主催は京橋の中央公論新社と森永エンゼル財団との共催になりました。再々開された源氏物語全講会の講義はすべて、鶴岡市出身の実践女子大学教授（現在尚美学園大学学長）松田義幸先生によってビデオ化せられ、そのコンテンツは四百時間を越えています。森永エンゼル財団からインターネットを通じて一般公開されています。「折口先生の時代にこういうものがあつたら……」と、岡野先生は残念がつて居られます。

× × ×

【二】「やまとだましひ」と源氏物語

三矢先生五十年祭

昭和四十八年十月三日（土）午後一時三十分から、三矢先生五十年祭記念の講演会が開かれました。会場は鶴岡市昭和町（現在はなくなっていますか）の山形殖産相互銀行鶴岡支店会議室、講師は國學院大学教授今泉忠義博士（國學院三十一期）でありました。演題は「三矢先生と源氏物語」。國學院大学院友会報に掲載されたお話をここに御紹介して参ります。

「私どもが三矢先生のおそらく最後の弟子の一人かと思えます。大正十二年に私は卒業してをりますから、まるまる三矢先生のお教へをいただきましたのは私どもが大体最後、十三年、十四年あたりに卒業された方々は、在学中にがお亡くなりになったといふことになるわけでございます。

三矢先生は七月十七日に亡くなられて六月の四日まで講義に出てをられたさうですから、まあ、一カ月半、二カ月ぐらゐお習ひになった方々が本当の意味での最後の

教え子でございませうが、まるまる卒業まで教へていただきましたのでは、私は最後のお弟子かも知れません。さういふ訳で三矢先生の思ひ出は数々ございますが、大正十年の五月三日から源氏物語全講会といふものをお始めになりました。源氏物語全講会と言ひまして『桐壺』から始めたら、みんな学校を出てゐる人なら、誰でも多少は読んでゐるだろうし、幾巻ぐらゐ読んでゐるだらうか、多分この巻ぐらゐまでは、といふやうなお気持ちがあつたらしくて、結局、『紅葉の賀』から『常夏』まで行きました。(中略) その大正十年時分に、私どもは学校の幹事として多少は下働きをさせていただきました。それで思ったより入りが良いからといふお話だったか、その記念のためにもといふ訳で、私もまでが呼んでいただきましたが、それがどこだったかはつきりいたしません。三矢先生は中華料理がお好きな方だったやうですから、神保町辺の中華料理屋だったかと存じます。そこで一杯ご馳走になりました。私はその時に、三矢先生にお酌して差し上げようと思ひまして、お銚子を持つて先生のお前にまかり出ましたら、『あの、私はそれは駄目だ』と耳をおさへてをられる。ですから『やつぱりお耳の方にこのアルコールはいけませんでせうか』と申しあげたかどうか、さう申しあげたのが終るか終らないうちに、『これは手製のサイダーだからこれが一番いいんで』とおっしゃいましたので、サイダーでお酌をして差し上げた。そのサイダーが何と三矢サイダーだったんです。(平成二十年、今年は三矢サイダーは創業百二十五年とTVのCMマーシャルが伝えている) それでこのお話が源氏物語全講会の初の時分の記憶となつて未だに私も忘れないでをります。」

このように、三矢先生の思ひ出を語られたあと本題に入られたのですが、全部で十九項目あります。

「例えば『源氏物語』、読み方の進歩に寄与なすった話』として、『おぼえずをかしき世を見るかな』といふのは『若紫』の巻の例ですが、『おぼえずをかしき世を見るかな』の『世』といふのを、三矢先生は『源氏と紫の上』との関係と、はつきりいつてをられます。つまり『世』は『男女の間柄』あるひは場合によつて男女の縁といったやうな意味で用ゐられるのですが、そしてこの意味は、今の註釈書もずぶんよく採用するやうになりました。江戸時代からこの意味は考へられてはをりましたが、源氏物語の諸所に出てくる『世』については、まだ大正の末くらゐまでは、単に『世の中』ではもの足りない、もう少し良い訳語はないかなといふやうなことで、探りを入れてゐた時代かと存じますが、三矢先生はかういふ所には鋭く、単刀直入に『この世』だつ

たらかういふ意味があたりなんだといふやうに、非常によく見極めをつけるお方でございました。この『世』について、三矢先生のやうに的確な意味にとつてをられた方が、五十年前、大正末期にどのくらゐあったか、おそらく三矢先生などが、この『世』に『縁』の意味のあることを広められた最初のお方ではないか、といふやうな気がいたします」

「思ひがけなく紫の上が源氏に見つけられて、かういふいい御縁がもたらされたといふのは、自分も非常に嬉しい気持ちで見えてゐる、といふ侍女の右近の気持ちを表はした所でございます」

と説明して居られます。

古い言葉を読みとくということは大変な能力を必要とします。それは、多くの知識と創造力、そして何より大切なのは、一種不思議なひらめきといったものだろうと思います。万葉集、古事記その他たくさんの貴重な書物が今日読めるのは、先人の、例えば万葉集なら先づ契沖師、古事記なら本居翁をはじめとする先人達のおかげがあつて読めることを、私どもは感謝しなければなりません。辞書を引けば「世は縁、男女の間柄」とかかかっていることに感謝することを忘れてはならないと思います。

× × ×

三矢先生が一番大切に考えていられたこと——「やまとだましひ」

今泉博士は以下十七項目にわたつて「三矢先生の源氏物語解釈への功献、お説」を紹介・解説して居られるのですが、それらは専門的なお話でありますので今日は省かせていただきます。この日今泉博士が最初にとりあげられたということは、三矢先生が一番大事に考えて居られたこと、ということになるのであるうと思います。それは、三矢先生の「やまとだましひと源氏物語」でありました。

『「このやまとだましひと源氏物語」といふ御講演は飯田町の校舎（國學院は飯田町に創立、大正十二年に現在の渋谷に引越をしました）で、私ども三矢先生に直接に伺いました。今のお方が『やまとだましひと源氏物語』なんていふ題を御覧になりますと、どんなふうなお話だらうと想像なさいませうか」

と今泉博士は切り出されました。この日の聴衆がどんな反応を示されたか興味のある所で

すが、あれから三十五年、今日の皆さんは何如でしょうか？ この言葉は戦後六十年忌み嫌われた言葉の一つと云って良いでしょう。もしかすると死語になって了っているかも知れません。

今泉博士は続けます。

「やまとだましひといひますのは、なんていひませうか、真先かけて突進しといったやうな、戦争に附属したやうな、日本人でなくては持つてゐないたましひ、そのぐらゐ忠勇義烈の精神といったやうなふうに、誰しも明治以降では感じると思ひますけれど」

とおっしゃいます。あの先の戦を反省、それこそ一億総懺悔の雰囲気の中で、多少なりともあの戦に協力したものは、何にあれ批判の嵐にさらされたのでした。わが国の過去を断罪したマッカーサーの指令で、私どもの教科書は墨でぬり潰されました。そうした意味・背景を持つ言葉の一つなのです。

昭和四十八年と云えば東京オリンピックから九年、四十七年には沖縄も返ってきて日中国交も回復、戦後に一区切りがついた時期でした。一方で、その四十七年には連合赤軍リンチ事件、浅間山荘事件と、新しい火種が燃えはじめて、この講演会の一ヶ月前には日航ジャンボ機ハイジャック事件、一ヶ月後には神奈川大内ゲバ殺人事件が起きるなど、物情騒然。公害問題前夜で、しかし全国的に見れば世の中は安定していました。お集りの皆さんは、この言葉を忘れかけていたと思います。この日の聴衆の皆さんは三矢先生ゆかりの方々ばかりだったでしょうから、この言葉に悪い思い出があつたとしても、三矢先生のお話だからと冷静にお聞きになつたろうと思います。

今泉博士は続けます。

「三矢先生のおっしゃるのは、その皆さんの思つていらつしやるやまとだましひと云ふのとは違います。源氏物語の中に『やまとだましひ』といふ言葉が出てまゐります。それは『乙女』の巻に、光源氏が自分の息子の夕霧をどういふふうに教育するかといふ所に『やまとだましひ』が出てまゐりまして、それを三矢先生が説明なさつたのです。漢文の学問、どうしてもあの時分は、やっぱり中国の制度がそのまま行はれてゐた時代でございませうから、大臣になつたりいたしますには向ふの四書五經といったやうな漢文の学問がどうしても必要だ。漢文の学問がよくわかつてきたら『やまとだましひ』もずい分その光を発するんだ。『やまとだましひ』を立派にするためには漢文

が必要、漢文の学問が必要だといふやうなことがあの巻にありまして」

このように今泉博士は話をすすめられましたが、「乙女」の巻の文章では、大和魂とはどんなものなのか？ 今泉博士、つまり三矢先生はどう考えて居られたのか？

「やまとだましひと申しますのは、今申しましたら日本固有の物の見方、あるひは日本固有の物の考え方がやまとだましひなのです」

これを折口先生はどうおっしゃって居られるか？

「大和魂といふ語をあなた方はきいてゐるでせう。戦争中は盛んに説かれましたが、軍人が説いたやうに、戦争を好んで死ぬのを何ともないと云ふのが大和魂だ、といふのはとんでもない間違いです。決して大和魂とはそんな意味のものではありません。日本の文化をしっかりと備へた心といふことなのです。それは理想的な心で、日本文化に根を据ゑて居り、すべて日本的なものを処理し得る心だったのです。

上流社会の人は、この大和魂を持たなければ世を指導することが出来ない。世の中を指導する人の持たなければならない魂が大和魂だったのです。この大和魂に対して唐才かうさいというふのがありますが、これは外国文化に対する知識を言ふのです。教養の高い人は唐才を持つてゐると同時に大和魂といふ力を持つてゐなくてはなりません。どうせ高い位置にある人は世の中を導いてゆかなければなりません故、大和魂が必要となるのです。光源氏はこの唐才を備へてゐると同時に、もう一つ、日本人が古くから持ちつたへてゐる大和魂——それは世の中を処理し判断してゆく立派な魂——とを常に備へてゐた人でした。世の中がどんなに変わって行つても世を治める人は大和魂と唐才とをもたなければならぬ。どこに一点の欠点のない人として光源氏は書かれてゐるのです。それで又大事なことは、さうした、身分が高くて容貌が美しいといふだけでは駄目で、それ以外に、上流社会にありがちな才能のないものであつてはならないので、才能のある、学問教養の高いといふ事が大事となつてきます。つまり、階級・容貌の他に才能がなければならなかったのです。

併し平安時代はさうした学問教養をもっと深く魂の中から考へて居ます。それが大和魂です。大和魂とは文化的なもので、支那風な文化を備へてゐる心に対してのものです。」「(「人間としての光源氏」『折口信夫全集 第八巻』)

長い引用になりましたが、唐才は絶対必要、それに加えて日本人固有の心が必要、その心が大和魂という事。三矢先生、折口先生、そして本居翁も云って居られるところなのですが、この「固有」、「固有の心」をどう考えたら良いのか？

「やまとだましひ」は日本人固有の根生いの心

この「固有の心」は、今風に、私流に云うと、いささか軽い表現かも知れないのですが「DNA」だと云えるのではないかと思います。「DNA」を絵に描いて見せることは出来ない。そうはいかないのですが、二千年の歴史の中で圧倒的な力をもった外国文化、儒・仏の文化の影響を受けながら、それでも消えてしまう事なく祖先達が受け継いできた心・文化。外国の優れた知恵に根絶やしにされる事なく生きのびてきた心・文化と云う事ではないかと思っています。

漢字到来以前の日本人の心と云う事だと思います。外国文化が入ってくる前にも私達の祖先達は生活していた。日々考え、日々行動し、生きていた筈です。その素朴な心を根生いの心と云っても良いと思います。それが固有の心、大和魂なのだと思います。

広辞苑を見ると「固有とは天然に有すること。もとからあること。そのものだけにあること」とあります。これを「日本人だけにあって他の国の人にはない、特別なすぐれたもの」と考えるとひどいことになります。他の国にもそれぞれ固有なもの、すぐれたものがある事は云うまでもない事です。平成の今日、毎日の生活の中で「それはDNAだ」と感じたり、口にしたりする事がある様に思います。明治以来、百年以上かかってキリスト教の信者の数が一%あまりにしかならないのは何故なのか。二千年間お世話になっている漢字の国の人の言動が全然わからないところがある事は、その証明のような気がします。

平凡社（小学館のものにはありません）の百科辞典をみますと「賀茂真淵および本居宣長によって改めて『やまとだましひ』『やまとごころ』が取り上げられるようになる。それは人間の自然の心情のままにすなおな心でやさしくめめしくもある心映えであり、宣長の『敷島のやまと心を人間はば朝日ににほふ山桜花』の歌もみやびで純一な民族性を詠んだものであった」（斉藤正二氏）とあります。

やまと人ならば誰の心の根にもある魂のこと、それはすなおな心、やわらかな心、ことに即して美しく、さとく動く心と云うべきか、それはやわらかで哀れを知る心に通じる。美しいものを美しいと感じ、清らかなものをけがれたものから感じとる心。何がどうだからだろうと云うのではなく、ものに即して感じる。本居翁の文章を読んでいるとこのお歌の心が伝わってくるのです。

大和魂とは？の答えはこのお歌一首でわかってしまう様な気がします。

「乙女」の巻の原文は「才をもととしてこそやまとだましひの世に用ゐらる方も強う侍らめ」とあるだけで、「やまとだましひ」の具体的な説明がないのは何故なのか。それは、当時は云うまでもない事、説明するまでもなくわかつていた事だったからであろうと思います。「三矢先生は平安朝の生活にも古代生活のひき続きがあると考え、そこに日本人のモラル・センスを発見する糸口を見出していた」（「三矢先生の学風」『折口信夫全集』）という折口先生の御指摘に、この「やまとだましひ」を重ねてみる時、國學者としての三矢先生のお心が感じられます。三矢先生が「やまとだましひ」を見出された所以を感じます。

× × ×

【三】私にとつての「國學」 「學問の道」

「兵乱は、決して文明を崩壊させはしなかったし、文明の流れを塞きとめもしなかった」
「中江藤樹は近江の貧農の倅に生まれ、独学独創。遂に一村人として終りながら、誰もが是認する近江聖人の実名を得た。勿論それは學問の世界で前代未聞の話」

「林羅山（藤原惺窩の弟子）は藤樹の生まれたころには既に家康の側近にあった」

「二人は私学・官学の祖と呼んで差し支えない。この二つの決脈は長く跡を引く」と、
小林秀雄氏は著書『本居宣長』で述べて居られます。

折口先生は「學問の道」という詩の中で、それは昭和十八年学徒動員で戦場に赴かなければならなかった國學院大学の学生達への餞の言葉だったのですが、

汝らの千人に一人 一人だに生きてしあれば

學問はやがて興らむ

とおっしゃって居られます。世の中どう乱れようとも學問はひき継がれてゆく。
人間の営みの尊さを思います。

× × ×

「國學」とはどんな學問か

「國學」はあの長い戦乱をくぐりぬけてきた「學問」の一派です。「國學」という言葉は

皆さんには馴染みのない言葉だろうと思います。

「三矢先生は最後の國學者であつた」と折口先生はおっしゃいます。

その「國學」とはどんな学問なのか？

江戸時代の初期、契沖師（1640～1701）にはじまり、荷田春満（1669～1739）賀茂眞淵（1697～1769）本居宣長（1730～1801）平田篤胤（1776～1843）という四大人、五人の偉才が後れ先立つこと三十年。独学・独創、師となり弟子となつて構築した「昔学び」「みくにまなび」「日本人の根生いの心を考える」学問である、という事が出来ると思います。この國學を継承されたのが三矢先生で、そのお志を受け継いだ折口先生は「新國學」を称されました。岡野先生はその折口先生の最後の内弟子でいらつしやいます。最初に一寸申し上げましたが、三矢先生は國學院第一期、折口先生は十八期、岡野先生は五十六期です。折口先生と岡野先生の間は三十八年の開きがあります。当然その間に、折口先生のお弟子さんはいらつしやいます。そのお一人が記念講演をなすつた今泉博士三十一期、三十三期の高崎正秀博士その他の方々がいらつしやいます。私は、この今泉、高崎両博士にお教えを頂きました。

その高崎博士に「和学と國學」と云う論文があります。「和学といふのは師匠からの言伝えを守つてゆくといふだけのいたつて非科学的なものであります。この学問を継いだ最後の人が北村季吟（1624～1705）でした。彼は近江の国の生まれで江戸の幕臣として倭学方になります。そして『湖月抄』を著はすのですが、いふまでもなく、それは「和学」の伝統の上になつたもので、獨創性が乏しく、従来のもを集成したに過ぎません。それが青表紙系の代表的なものであります。ちょうど季吟が出た前後から浪人の学問が興つて参りました。それ以前のいはゆる和学者と呼ばれた人々は、もっぱら古今集以後の学問を対象とした師匠の聞書、歌学問に過ぎなかつたのであります。これに対して、新しく興つた浪人の学問といふものは、万葉集、古事記といったやうな奈良朝あたりの古い所から始め、これを平安朝のものと比較してゆくといふ研究になつたのであります。非科学的なこれまでの「和学」に対して、浪人の学問を「國學」と称します。その元祖が契沖（1640～1701）でございまして、これが荷田春満（1669～1739）に受け継がれていった「野党」の学問であります。

契沖は悉曇学に詳しく、万葉集の研究にあつては『万葉代匠記』といふ注目すべき業績を残しました。仏教の方では内典（仏教の学問）外典（外国の学問）といひますが、その研究におきましても契沖の右に出る人はまづゐないでせう。彼の師匠であつた下河辺長流（1624～1686）は和学者でしたが、やはり浪人者でありました。このやうにして『國學』といふものは民間から興つてきたものであります。『みくにまなび』といふ國學に対して、

昌平黌のいはゆる官学といふものは朱子学を中心としてをります。我々は間違っても官学に移行してはなりません」と。

私が「古いことを勉強する学問、みくにまなびの学問」それが「國學」で、昌平黌に対抗する民間・野党の学問、それが「國學」だと教えられたのは六十年前の事です。國學院の予科に入っただけの事です。街は空襲のあとがそのまま、至る処茶色。見渡す限りの焼け野ヶ原。渋谷の東横線のホームから見ますと、渋谷が谷である事を実感させる。そう、大きな中華鍋を上から見る様な焼け野ヶ原の向う、黒い森とその隣の小さな塔が見えました。それが氷川神社の森であり、國學院でした。

折口先生が「どこもかしこも灰だらけ 廃墟の中にすっきりと立った姿に泣けてくるなあ國學はほろびず」と歌われた風景です。一人だに生きてしあればと歌われた折口先生は、焼け野ヶ原の廃墟の中によくぞ焼けずに残ってくれたと歌われ、入学したばかりの私どもは毎日この歌を歌ったものでした。が、私は國學院の何たるかを知りませんでした。可愛がって下さった国語の先生の「お前、國學院！」と云うおすめのままに國學院の門をくぐったのです。高崎先生の最初の授業の時、「入学お目出度う。諸君はもう大人です。私は諸君を紳士淑女と心得ている。諸君もそのつもりで勉強して貰いたい。大学は今迄の様な教えてもらう所ではありません。自分で勉強する所です。」という前置きがあって、「國學院は國學を究める所であること」、「國學とは「みくにまなびの学問」「我らの国の古いことを勉強する学問」なのだ」という話を聞かされたのです。その時私の頭をかすめたのは「これは日本の文芸復興だ」という事でした。「國學」は知らなくても「文芸復興」は知っている。自分の国の事は知らないのに外国のことは知っている。妙な事と云えば妙な事と云えるでしょう。いや、コトの大きさが違う、と云えばそれもそうかも知れませんが、私は教科書を墨で真黒にさせられた世代ですから、中学（今の高校）で日本史を習っていません。当時は日本史は高学年のものだった様に思います。中学の歴史は先ず外国のものだった。悪名高い軍人さんの統制も歴史の教科書までは及ばなかった？ それほどおバカさんではなかったと云う事でしょう。あまり勉強する方ではない私が「ルネッサンス・文芸復興」を知っていたと云うことは、習っていたと云うことになるのですが、記憶は定かではありません。

「國學は文芸復興の学である」

戦に負けたあとの一億総懺悔の嵐の中で、ラジオは占領軍制作の「真相はこうだ」が「われらはかく悪を行い」と告発・反省していました。先輩は勿論、私と同年輩の人までも、先の戦の間の悪をまるで他人事の様に告発していました。聖戦遂行のために、日常生活の

中でひどい事が行われていたようなのですが、私のまわりには、学校の先生達は勿論、大人達も、熱くなってひどいことをする人達は居なかったのです。特異と云えば特異なのかも知れませんが。「真相はこうだ」には衝撃と反発を覚えていました。そう云う時の「みくにまなび」の話は衝撃的でした。「文芸復興」は私の心に明るい「灯」となってもされたものでした。然しそこが私のいいかげんな所です。「みくにまなび」に飛びこむことはしませんでした。「みくにまなび」の学校に居て、遂に学ぶことなく五年間（旧制予科一年、新制学部四年）を終わろうとしていました。國學院の学生にして古典を勉強しない学生は、いわば不埒者でありました。たまたま放送局へ入りたいと云う友人が居て、彼につきあう形で、まあ座興のような軽い気持ちで受けてみたのです。誠に不埒なことではありました。結果は、彼は落ち私は入った。けれど就職難の中で私は就職するつもりはありませんでした。そんな私を彼は批難したものでした。その時、生命を終わろうとしていた母がこの合格を喜びました。電報を手ニコニコ笑っていました。「水商売はやめて貰いたい、毎月毎月きちんと月給の入る仕事をするように……」が口ぐせでした。合格した暮にこの言葉は遺言になっていました。これを口実に「月給を頂ける放送局」に私は入り、以後定年まで「みくにまなび」とは遠いくらしをしたのです。でも「みくにまなび」に近づきはしなかったものの、「國學は文芸復興だ」という思いは頭の中で燦々していました。この間、「國學」は戦後の社会風潮の中で否定的に語られていましたから、これを「文芸復興だ」などと肯定的に位置づける議論が生まれる訳もなく、そのような話を聞いたことはありませんでした。今度こちらへ伺うことになっていろいろ調べている中に、ふと折口先生はどんな見方をして居られたの？と探してみました。

折口信夫全集の源氏物語関係の頁をめくりました。「文芸復興」の活字探しです。頁をめくる、さーッと目を通す……。ありました。みつめました。「文芸復興」だと認めて居られます。これで安心して本日この席に出て参りました。

× × ×

戦後の六十年、「大和魂」も「國學」も、先の大戦中の本意ではない使われ方でもてはやされ利用され、それが敗戦後、今度はその反動でこれも本意と関係なく、否本意など尋ねる気持ちなど全くないままに今日まで居ります。若い方々には私のこのこだわりはおわかり頂けないかもしれませんが、この誤解は解いておかないと、せめて私の手の及ぶせまいせまい範囲には話をしておかねばならないと思っています。「國學は文芸復興の学である」

これなら今の若い人にも通じるであろうと思うのですが、何如でありましょうか。

× × ×

四 「もののあはれ」を知る文学・源氏物語

「やまとだましひ」と「もののあはれ」

これは私が参加している勉強会の一つでのことです。その勉強会の会員が「家持という人はその歌を見るとなかなかの人だと思うのだが、あの『海ゆかば』はどう云うことなのか？ 家持という人はあんな好戦的な人だったのか？」と質問されたのです。その日の講師でいらした岡野先生のお答えは、「大伴家は古くから大和朝廷をお守りする家柄でした。家持はその大伴氏の族長でした。新興の藤原氏に圧倒されて若い人達が何かと騒ぐ、この若い人達に、我らの本来の役目は朝廷をお守りすることだ、これを忘れてはいけないとしためたものです。決して好戦的なものではありません」と云うものでした。今の若い研究者は幸い戦争中の雰囲気御存知ないので、すなおに受け入れて納得なさった様でした。岡野先生がおっしゃるのだから……という事もあったかも知れませんが、この話を私は横浜の小さな勉強会で致しました。私とほぼ同年代の方が「私はこの歌を決して許さない。私の父親はこの歌に共鳴してあの戦争を美化・協力した。お前の今の話は一応理解するが、それで私のこの歌に対する気持ちはかわらない。本意などどうでもいい。この歌は、家持は戦争犯罪を犯した」と強い口調で話して居られました。

「君が代」も「日の丸」も「大和魂」も、六十年間、この思いの池の中にあるのです。

敷島の大和心を人間はば 朝日に匂ふ山桜花

有名な本居宣長翁のお歌です。平凡社の百科辞典で大和魂の説明に使われていることは先に述べましたが、かつて、かの戦争中、我らは大和魂という特別な魂を持つ人間なのだ！ 潔く散れ！死ね！という意味でもてはやされた歌です。

本居翁は桜の歌が好きで居られた、その桜の朝日に匂う美しさをお歌いになった、美しいことを歌って居られるだけに、歌の中に一言も歌われていないはらと散るさまを引っぱりこんで、潔く散れよ！と、「美しい心」を「猛々しい心」に読み替えられてしまったのです。

本居翁が「物の哀れを知る」という事を大切になすったという事は有名な事であろうと思います。「物の哀れを知る心」を大切になすったお方であった事を考えれば、丸いものを

四角に切って丁う様な解釈は生まれて来ない筈なのですが、誠に不幸な事でありました。時代がそういう誤解をさせて了ったという事なのでしょうが、考えてみれば世の中すべて誤解、為にする人に利用されて本意とは別のところで動いてゆく、そんなもんだという言い方も出来る様に思います。

× × ×

本居翁は「源氏物語は物の哀れを知る人の物語」だとおっしゃり、「およそこの物語の五十四帖は物の哀れを知るといふ一語に尽きぬべし」とも云っておられます。これに対して三矢先生はどう見て居られたか？ 私は「源氏物語はやまとだましひの物語なり」とおっしゃると思うのです。三矢先生は本居翁のようにはっきりと言葉にして居られませんが、それなのにこんな独断が許されるのか？と気になっていたのですが、今回の色々の資料の読みなおしの中で、鳥野幸次氏が「源氏物語を大和魂で解釈せん」としておられたと記して居られるのを見つけました。鳥野氏の「三矢重松伝」は二度三度読んでいるのですが、この「大和魂で解釈せんとして」全講会をおはじめになったという大事な所、肝心な所を何故か読み落としていたのです。本当に迂闊なことでした。全くいかげんな読み方をしていたものだと恥ずかしくなりますが、これもおかげさまで今回すっかりと申し上げる事の出来るのを有難い事に存じます。三矢先生があと五年御存命で全講会が全部終っていたら、「源氏物語はやまとだましひの物語なり」とおっしゃったであろうと思います。

それは「やまとだましひ」という物指を使って源氏物語を読むという事です。

× × ×

本居宣長「もののあはれ論」

本居翁は「源氏物語」を「物の哀れを知る心」という物指を使って読み解かれました。およそ源氏物語を読む人で、この「物の哀れを知る心」をす通りして知らぬ顔をする人は居ないと思われませんが、私なりに一応おさらいをしてみたいと思います。

「物」とは「靈魂」ということ、「情」ということ、「哀れ」とは一般的な「かわいそう」というだけでなく、喜怒哀樂、人間の發する詠嘆の声と理解してよいように思います。

「まづすべてあはれといふは、もと、見るもの、きくもの、ふるることに、心の感じ出る歎息の声にて、今の俗言にも、ああといひ、けれといふ、是也。たとへば、月花を見て、感じて、ああ見ごとな花ぢや、はれよい月かななどいふ。あはれといふは

このああとはいれとの重なりなるものにて、漢文に嗚呼などある文字をああとよむも是也。古言にあな、又あやなどいへるあも同じ。又、はやとも、はもともいへるはも、かのあはれのはと同じ」(本居宣長玉の小櫛・二の巻)

とあります。

以下「物の哀れを知る心」を『紫文要領』に探ってみますと、

「見るもの聞くものにつきて哀れなりとも悲しとも思ふが心の動くなり。その心の動くがすなはち物の哀れを知るといふものなり。この物語は物の哀れを知るより外なし」(六二頁)

「物の哀れを知らさむ為の源氏物語なり。勸善懲惡のため、ことに好色の戒めに書くといふは大きにひがごとなり」

「すべて良し悪しといふものは、その道その道によりて変り、また時にふれて所にしたがひ事によりても変りあるものなり。仏の道にてよしとすることも儒家にては悪しとし、儒道にてよしとすることも仏家にて悪しとすることもあるやうに、よし悪し変ることあり。

歌・物語は、儒仏の道のやうに惑ひを離れて悟りの道に入る道にもあらず、身を修め家を齊へ国をひとやう治むる道にもあらず、おのづからその中につきてもまた一様のよし悪しあるなり」(『紫文要領』八十三頁)

「物の哀れを知るが善なり。儒仏の道にいふよし悪しと格別の違いあるにあらず、おのづから変るたがところあるは、先づ儒仏は人を教へみちびく道なれば、人情に違ひてきびしく戒むることもまじりて、人の情のままに行ふことは悪しとし、情をおさへてつとむるを善しとすること多し。

物語はさやうの教戒の書にあらねば、儒仏にいふ善悪はあづからぬことにて、ただよし悪しとするところは、人情にかなふとかなはぬとの分ちなり。

人情にしたがふとて、己が思ふままに行ふとはあらず。ただ人情のありのままを書き記して、見る人に人の情はかくの如きものぞといふことを知らするなり。さてその情のやうを見て、それにしたがふをよしとす。これ「物の哀れを知る」といふものなり。人の哀れなることを見て哀れと思ひ、人の喜ぶを聞きてはともに喜ぶ、これすなはち人情にかなふなり。物の哀れを知るなり。

人情にかなはず物の哀れを知らぬ人は、人の悲しみを見ても何とも思はず、人の憂

を聞きても何とも思はぬものなり。かやうな人を悪しとし、かの物の哀れを見知る人をよしとするなり。たとへば物語の中に、いたりてあはれなることのあらんに、かたはらなる人これを見聞きて、一人はそれに感じてあはれと思ひ、一人は何とも思はずあらん。その感じて哀れがる人が人情にかなひて物の哀れを知る人なり。これをよき人とす。何とも思はぬ人が人情にかなはず悪しき人なり。さればその物を今読む人も、その哀れなることを見て哀れと思ふは人情にかなふ人なり。何とも思はぬは物の哀れを知らぬ人なり。ここにおきてかの物語の中の一人、物の哀れを知る人をよしといひ、物の哀れを知らぬ一人を悪ししとするを見て、かの読む人の物の哀れを知るやうになるなり。これすなはち、物語は物の哀れを書き記して、読む人に物の哀れを知らすといふものなり。されば物語は教戒の書にあらねども、しひて教戒といへば、儒仏のいはゆる教戒にあらで、物の哀れを知れと教ふる教戒といふべし」(『紫文要領』八十三頁)

長い引用ですが、私がよけいな言葉をさしはさまぬ方がお分かり頂けると思います。本居翁は、自分はいくどい人間で、物ごとは何でも確かめないと気がすまない、と言っておられる通り、実に行き届いた説明になっています。

この「物の哀れを知る心」は源氏物語にとどまらず、すべての小説・物語、いや人の世のすべてに通ずるものがあるうと思います。この「物の哀れを知る心」という「物指」をあてると何でも見えてくる。おのずと答えが見つかる様に思います。

宣長の物語論

「儒仏は人を導く道なれば、人情に違ひてきびしく戒むることもまじりて人の情のままに行ふことをば悪しとし」とは、云われて見ればなる程その通り、そうだその通りだと今さらの様に思います。儒教とは？仏教とは？と問われて、すらすらとこんな風に答えられますか。短い言葉でその本質を云い切ることはやさしいことはありません。よく分かっているなければ出来ません。私もなら、あれやこれや、ややこしいことを云ってしまいそうに思います。流石に本居翁、なるほどと思わせられます。実には的確です。「人の情のままに行ふことをば悪しとし」と云うのは、「情のままとはいわば動物と同じということ、されば人間としては当然情をぐっとおさえて、理で考えて、親が子を訴える」ということにもなる。その出来る親、右から左にそうする親など居ないでしょう。「情をおさへてつとむることは善」の建て前が通らなければ世の中治まりません。それは当然のこととして「物語はさやうの教戒の書にあらねば」「儒仏に云ふ善悪はあづかりしらぬことにて」と云って

おられる。儒仏の人に云わせれば、とんでもない実に怪しからん話でありましょう。勸善懲惡、因果応報万能の世に、儒の道に通じた人がこれだけのことを云っている。実に画期的なことだったと云えると思います。「ただよし悪しとするところは人情にかなふとかなはぬとの分ちなり」とはなんぞや、そんなことを云ったら学問、儒仏の知恵は必要なしと云うことになって了うのか？というのと、そうではない、「人情にたがふとて己が思ふままに行ふといふにはあらず」、思うままになどということはいけません。それでは人ではない。では、その所はどう考えればいいのか？「ただ人情のありのままを書き記して、見る人に人の情はかくの如きものぞといふことを知らするなり」物語とはそう云うもの、そう解釈するものです。と云う訳です。実に見事な物語論だと思います。これは現代の作家・評論家の言葉として通用するように思います。作家は何故小説を書くのか？つまるところ「人とは、人生とは何ぞや」を追求、考える為に小説を書く、書いて居られる。我ら読者は、作家のくりひろげた世界に自分以外の人生を体験し、「人・人生」を考える。「人情のありのまま」は教戒の書にあるようなものではありません。もつとどろどろしている。悪い人は多い。悪いことをしながら良いことを考え、良いことをしながら悪いことを考える。それらを「ありのまま」に、つまり今で云う写真と云うことですね。それを「見る人に」と云うのは、読む人に「人の情はかくのごときものぞといふことを知らするなり」と云うのです。実に明解です。よくわかります。本居翁と云うお方は、これでもかこれでもかと、念を押さぬと気がすまぬというお方であつたことがよくわかります。

「人の実の情」こそ大事

「人の哀れなることを見ては哀れと思ひ人の喜ぶを聞きてはともに喜ぶ」本当にそうありたいと思います。「これすなはち人情にかなふなり」とおっしゃる。人情にかなうかかなぬか、そののけじめ、まことところが大切とおっしゃる。さらに「大方人の実の情まことこころといふものは、女童の如く未練に愚かなるなり。男らまこところしくきつとして賢きは実の情ならず。それはうはべをつくろひ飾りたるものなり」とおっしゃる。「女童の如く未練に愚かなるもの」「男らしくきつとして賢きは実の情ならず。それはうはべをつくろひ飾りたるもの」とくるのですから、はじめて読んだ時、思わずびっくり、読みなおしたものでした。私も「男は人前で泣かぬもの」「男はいつでもきつとして賢くなくてはならぬもの」が常識でしたから……。そしてこれも「國學の心」なのだと思つたものでした。

日本の男が泣かなくなつたのは何時の頃からなのか？イザナキの神がイザナミの神に先立たれた時の悲しみの深さ、「みまくらべにはらばひみあとへにはらばひなきたまふ」と古事記は伝えるのですが、古事記はどんな声で泣いたのかわかりませんが「はらばつて泣く」

というのは「号泣」といつても良い泣き方でしょう。お前の為に……と火の神を斬ってしまふ。その悲しみの深く大きかったことが感じられます。紫の上を先立たせてしまわれた源氏の君の悲しみもその泣くお声が聞こえてくるように思います。女々しく泣いて居られる。

死出の山越えにし人を慕ふとて

あとをみつゝもなほまどふかな

紫の上からの文を煙になさる時の涙、愛する人を先立たせた人にはよくわかる涙でしょう。この場合もどんなお声か書かれていないのですが、男は「女童の如く未練に愚かなるなり」は、この百年を考える時、大切なことの様に思います。「男らしくきつとして賢きは」と口にした、そんな人が、猛々しい戦好きの人の様に思われてしまうのですから、世の中とは恐ろしいものです。数年前、いや、もうそろそろ十年前になりますが、本居翁没後二百年の年に二、三の雑誌が特集を組んでいましたが、その中で誰方だったか「小林さんが最後の大仕事に本居宣長なんぞを書かれた。困るんだナ」と発言して居られたのを覚えています。小林さんとは小林秀雄氏の事です。あの「困るんだナ」といったお方は、小林氏の『本居宣長』を読んでいるのか？ 本居宣長全集の頁をめくったことがあるのか？ 本意を知らずに高名な方が発言なさることの恐さを思います。

宣長こそ源氏物語の最良の導き手

我が家の植木屋の親方はよく本を読む人でした。歴史大好きです。しかも弁説さわやかで、地域の職人さん達の尊敬を集めていました。この人は興が乗れば翌日の仕事のことなど忘れて徹夜で読んで了う。翌日早速お茶の時間などにそのおさらいをします。時にチョツカイを出そうものなら、応戦に懸命になって仕事を忘れて了います。そんな日の手間賃を請求してくるような人ではないのですが、当方としては予定が狂うのは困りますから、よほどのことのない限り、チョツカイは出さないことにしていました。この親方、私を相手にするのは勿論、若い職人さんの誰彼をつかまえては勉強したことを話して聞かせる。声は良い、舌はなめらか、若い職人さん達は尊敬する先輩の話ですからそっくりそのまま信じて了います。こんなこともありました。「いやだね、いやになりますね、汚らしいね。イザナギの命とイザナミの命は兄と妹なんだってね。本当にいやだね」と怒っているのです。「古事記にそんなことは書いてないこと。外国の神様を研究して兄と妹だと考える様になったこと」などを話したのですが、一向に納得してくれません。「そんなことは書いてなかった。悪いけど旦那の話は信用しない！」と怒って帰って了いました。この親方によれば「光源氏」という人は怪しからん！ということになります。

こういう人はあちこちに居られる筈です。たとえば、源氏物語をどう読もうとその人の自由、私などのとやこう云える筋合のものではありません。しかし、違うのではないかと云ってみる位のこととは許されるでしょう。その結果、もしその人が私の言い分の少しでも理解してくれたらこんな嬉しいことはありません。

源氏物語をお読みになる時は、本居翁の紫文要領・源氏物語玉の小櫛の、どちらかを読んでみて下さい。各地の公立図書館にいらつしやればお読みになれます。今日御紹介申しましたようにわかりやすい文章です。しかも註釈がきちんとしています。研究者の方々のおかげを感じます。そして、「物の哀れを知る心」という「物指」をあてて読んでみて下さい。御自分で直接確かめてみて下さい。私は「なるほど、なるほど」と納得させられるばかりです。

かの悪名高い六条の御息所、あの車争いの場面、けしの匂いにおなやみの御息所、伊勢へ赴く事とおきめになる御息所。すべてがお気の毒、哀れでたまらなくなります。岡野先生が「車争い」を読んで下すつた時、たそがれの銀座通り（会場が京橋なのです）に御息所が浮かび上がってきたことがありました。江戸の端歌の一節に「六条なんぞはおうこわや！」などと歌われていますが、私にはとても「こわや！」などという気持ちは起こりません。こんなに同情したらとりつかれる？大丈夫、私は男ですから……。本当に「あはれ」です。「おほよそこの物語五十四帖は物の哀れを知るといふ一言に尽きぬべし」であります。

「折口信夫氏は、宣長は『もののあはれ』という語に、その用例を越えて盛り切れぬほどの内容を盛り込もうとした、と云っておられた」と、小林秀雄氏はその『本居宣長』の中で紹介して居られます。折口先生の深いお気持ちは私にはわかりませんが、私のような初心者には、この「こめすぎ」がすばらしい。有難く感じられます。実に有効なのです。本居翁の云われる通り、五十四帖すべて、この「物指」をあてると何となくわかる、心が動くのです。そして、私は、このやりきれない今の世の毎日毎日を、この「物指」をあてては考えます。

× × ×

【五】「もののあはれ」と「いろごのみ」

折口信夫の「いろごのみ」

「こめすぎ」とおっしゃった折口先生が「いろごのみ」という「物指」を作って下さいました。この「いろごのみ」というのは所謂「好色」とは違います。私の浅い理解で申し上げるので、十分な説明にならないかも知れませんが、「いろ」とは異性男にとっての女、

女にとつての男、「こ」は「選ぶ」「選択する」「見つける」ということです。折口先生は「人間としての光源氏」の中で次の様に述べて居られます。

「物語に盛んに出てくる語で『おもひくまなし』といふ語がありますが、源氏はおもひくまなき人でした。『思ひ隈なし』とは、ゆきとどいて物思ふといふことでして、言ひかへれば思ひやりの深い人といふことになります。誰でも、人の言ふ語が何でもわかる、と思ひますが、なかなかさうはいかないので、人の言つてゐる語の意味は本当にはわからないのです。ところが、源氏といふ人はそれがよくわかる人でした。これは女の望んでゐた性格だったのです。さういふ性格はどこから出てゐるかと言ひますと、日本の昔の典型的な男の共通して持つ性格といふものがありまして、そこから来てゐるわけなのです。只今では誤解されてきてゐますが、『色好み』といふのがそれなのです。現在の我々は色好みといふことを、いやらしい、けがらわしいことのやうに思つてゐますが、源氏物語の時代に使つてゐる色好みは、決して私達が考へるやうなものではなく、全く別の意味だったのです。つまり、立派な婦人を選択することが色好みだったのです。いろとは立派な婦人の特色のことであり、好みとは選択といふ意味だったのが、それを漢字にあてはめると『好色』といふのにあたるので、昔から悪いことのやうに思はれて来易かつたといふだけで、本当はさうではないのです。源氏は表向き好色のやうに書いてゐますが、実はそれは『色好み』といふことで、立派な男らしいといふことだったのです。源氏物語を読めばわかりますが、源氏を書いた作者は、色好みといふことは、男性として一番いいと考へてゐたに違ひありません。それが、時が變つて、だんだんと解釈が變つてくるやうになります。女のすぐれた点を選択することが色好みなのですから、どうせ男女両性の生活に係のあることなのですが、それだけではけがらしいとは言へません。では何故そんなことが重要なのかといふことになります。

日本では昔、女の勢力が強かつた時代がありました。女が男よりえらいのはその宗教力だったのです。神の心を直接に聞くことの出来るのは女です。女が神のそばにゐて、神が自分の心でうちあけねばならぬやうにしむけたわけで、それが巫女です。つまり巫女とは神の語を聞く者で、どんなに偉い男でも、それは出来ないことでした。日本の神の宗教では、一番偉い女が神のそばにゐました。さうして、この巫女が神の語を自分の親族の男それら主としてその巫女の兄弟といったやうな男に伝へ、それによつてその親族の男が国を治めてゐたのです。つまり世の中を治めてゐる男と並んで、その国を治めてゆくに必要な神の語を聞く女が神に仕へて居ります。それは神が決し

て男にはものを教へなかつたからです。女性の伝へる神の語によつてその国を治めてゆくといふのが、昔の国々、村々のまつりごとだったのです。世の中が乱れてきますと、そこに色々の問題が生じてきます。娘が神に仕へてその親が国をおさめてゐる形のところもあれば、又神に妹が仕へて兄がその神の心どほりに世の中を治めてゐる形をとつてゐる所もあります。ともかく神に仕へる女の親族の男性がその国を治めてゐたのです。さうしますと、ここにAといふ国があつて、これをBといふ国に併せようとすれば、Aの国の神に仕へてゐる一番高い地位の巫女をBの国に連れて来てしまへば、A Bの国は合併してしまふことになるのです。又Cの国とDの国の間を併せようとすれば、Cの国の巫女である高い地位の女性をDの国の后として迎へれば、Cの国の力はDの国に移つてしまふのです。といふのは、事実さう考へてゐる時代だからそれを実行することが出来たのです。併し、神の力はCからDに移つても、Cの国を治めてゐる人や、又その国民が従はなかつたり、そこに争ひが生ずる場合もあるでせうが、根本の力が移つてしまつてゐるのですから、その解決はつき易い。神が移ると同時に根本の力は移つてしまふのです。非常に力のある信仰の深い女性を選んで自分の国に迎へることは、昔、自分の村なり国なりを發達させるに重要な事だったのです。国得にとが併さつてゆく為にはどうしても神に仕へる処女を迎へなければなりません。さういふ事が段々色好みといふことになつて行つたのです。それが支那の字にあてはめると好色となり、いけない事のやうに考へられて来たのです。併し、源氏物語では色好みといふことが立派な人間にとつて大切なことであり、これがなくては世の中に処して行くはたらきのある人間とは言へない、といふことが書かれて居ります。源氏は色好みの人となつてゐますが、それでいけない人とは考へられてゐません。立派な人として描かれてゐるのです。ところが、他の国の考へにあてはめてみますと、つまり、支那の儒教と照らし合せてみますと、何でも彼でも男女の間の礼儀を取り締まつてゐますので、さうした男女の間に起る問題を過ちのやうに考へて、一も二もなく悪いものとしてをりまして、仏教などでは宗教的な迷ひとなるのは異性だと考へて、如何に日本でさうした男性を理想的な型としてゐても、やはりそれを許しません。女に対する態度が日本人と儒仏の道とは全く違つてゐます。だから、色好みがだんだん悪い事のやうに考へられてくるのです」

長い引用になりましたが、「いろごのみ」とはどんなものかおわかり頂けたことと思ひます。何如でしょうか。

「女に対する態度が日本人と儒仏の道とは全く違つてゐます」「我国では女の勢力が強

かったのです」「神の心を直接に聞くことの出来るのは女」「その神の語を自分の親族の男に伝へ、それによってその親族の男が国を治めてゐたのです」「女性の伝へる神の語によってその国を治めてゆく」——男と女とは、女と男とは、そういう間柄であるという事です。「男尊女卑」などという言葉、考え方など、全くありません。「七才にして席を同じうせず」や「悟りの邪魔、五戒（偷盗・殺人・邪淫・妄語・飲酒）の一」とする儒仏とは違います。という訳です。

× × ×

儒仏の道

儒が我国に入つて来たのは何時の頃からでしょうか。

大島正二氏の『漢字伝来』（岩波新書）は、次のように教えてくれます。

「古事記には応神天皇の条に、百済から和邇（王仁）が渡来して『論語』と『千字文』を献上したことを、次のように記している。百済の国王は、大刀と大鏡とを献上した。また天皇は『もし賢人がいるならば献上せよ』と仰せになった。そこで、その仰せを受けて献上した人の名は和邇吉師である。『論語』十卷、『千字文』一卷、合せて十一巻を、この人に持たせて献上した（中略）また、これと関連する記事として日本書紀は次の様に伝えている。

応神天皇十五年の秋八月に百済から阿直岐（阿知吉）が来朝したが、彼はよく經典を読んだので太子（菟道稚郎子）は彼に師事した。また翌十六年二月には阿直岐の推挙によつて王仁が来朝し、太子は王仁について諸典籍を学んだが、深くすべての道に通じるようになった、というのである。

ここに言う応神十五年は『日本書紀』の紀年（皇紀元年＝西暦紀元前六六〇年＝から数えた年数）では西暦二八四年に相当するが、おそらく百二十年ほどの誤差があつて、実際には五世紀初頭のことであつたろうと考えられている。すなわち、四世紀ないし五世紀の初めの頃には本格的な漢字・漢文の学習が行われはじめた、と推測しても大きな誤りはないであろう」

と述べて居られ、その上で、「色々と考えると、二〇〇年前まで可能性がある」とおっしゃり、二千年ないし千六百年前に儒は伝来、「上層階級の人によって漢字・漢文の学習が本格的に行われはじめた」「文字を持たなかった私どもの先祖がよその国で生まれた文字に

遭ったその喜びは何如ばかりであつたろうか、と思う反面、何の事やらわからず、只見るだけと云う事だったかも知れない」「この一大事件を受けて、わが先祖はこれを勉強し、自らのものとし、さらに自分達のことばとしてこれを書き現すと云う実に驚くべき事をやってのけたのです」（大島正二『漢字伝来』）。

この大島氏の云われる驚くべき事をやってのけるまでにどの位の時間を必要としたのでしょうか。五百年？ 三百年？ 百年？ とにかく古事記の七百十二年のかなり前には創り出されたと考えて良いまつりごとでしょう。この圧倒的な漢字、儒仏の文化は忽ちに「政」の中枢に座を占める。その思想は「政」に携わる人々の言動を支配する様になったと云つていいでしょう。「我々人文科学者、人文科学系の仲間は、皆ヨーロッパのどこかの一国に知的母国を持つている」と、さる有名大学の先生が新聞のコラムに書いて居られました。その切り抜きはなくしてしまいました。これを読んだ時、そう、もう十年位になりますか、そうか、大学の人文科学系の先生は肉体的には日本人だが、知的には日本人ではないのかと本当に驚いたものでした。

が、考えてみれば、明治以降の「学問の方法」はすべてあちらのものである事は確かなので、しかも、あちらの言葉で学ぶわけですから当然のことかも知れないとも思つたものでした。勿論あちらの長きをとつて短きを補つてきたから今日があるのですが、二千年前から、わが日本列島にはそういう時代が続いて来たと云えるように思います。

× × ×

「儒仏の道」が日本列島にゆきわたつて千五百年、明治維新から百五十年、キリスト教の教えも加わつて、人々の倫理感には儒仏風・キリスト教風に染まつたと云つて良いでしょう。その儒仏の道は本居翁の云われる「儒仏の道は惑ひを離れて悟る道に入る道であり身を修め家を齊へ国を治むる道」である。その儒仏の道に「処女が子を生ず」「女性と性を遠ざけろ、女性に罪をおしつけろ」（片木智年『少女が知つてはいけないこと』PHP研究所）と説くキリスト教の教えが加わり、さらに明治初年以來重婚が禁止されて日本人の男女のあり様は決定的に固まつたと云える様に思います。こうした事情の中で、折口先生のおっしゃる「女に対する態度が日本人と儒仏の道とは全く違つて居ります」は受け入れにくいかも知れません。「違ふでしょう、日本人の男女間は儒仏の道・キリストの教えそのものでしょう」と云うのが「常識」。それが現代なのです。でもだからこそ、そう云う現代だからこそわが先祖の時代の「女に対する態度」を考えなおす必要があるように思い

ます。フェミニズムの方々によると、日本人は女を虐げる事の甚だしい世界最低の国、ひどい国と云うことになるようなのですが、何故そうなのか、考えて見て頂きたいところです。

× × ×

新たな「女性達の時代」に

「戦後強くなったものは女性と靴下」——いかにも古い言い方ですが、これは実感です。ますます強くなってきました。女性達の社会への進出は目覚ましい。目を瞠るものがあります。

この四月、「婦人公論」が「それでも男は必要ですか」を特集していました。表紙は市川海老蔵丈の大笑し。作家の柳美里氏「父も夫も不要」と宣言しています。男は必要だが夫は要らないという訳です。これに拍手を送る女性達は多い筈です。この現象は男女の関係を大きく変えることでしょう。明らかに女達が男を選択びはじめたことを意味している様に思います。北京のお祭りでの女達の何と立派だったことか。飲食店などでも主導権は女性が握っている。ハキハキと注文する女性達の前で男どもはニヤニヤ笑っているだけという姿をよく見かけます。女子大生にアンケートをすると「結婚はしない」「結婚するなら年下」という答も多いと聞きます。三十年、四十年と連れ添って、定年と同時に離婚と云いわたされてうろたえるという話もよく聞きます。彼の半生の当然のむくいでしょう。

先日、我が家の隣の空地で家づくりがはじまりました。初日、たくさんの材木が運びこまれて棟上げの作業がはじまったのですが、起重機が一台、操作をしているのは女の人。あつという間に終わってしまいました。屈強の若者が梁を担ぎあげ、掛け矢をふるって組あげる、そんな姿は全くありません。静かに、静かに。大声など全く聞かれずに作業は終わり、起重機も職人さん達も散ってゆきました。酒を飲んだら車の運転が出来ない御時世では、建前の式も直会も不要のものとなりました。土木・建築という男の「力」が必要だった世界も、機械が入れば「力」など要らなくなります。

今や、女性の出来ない、女性の居ない職業などないでしょう。

池波正太郎氏の対談集を読んでいたら、「女が板前。ちゃんとした料理屋の板前だと味が狂うんだよ。今日辛かったと思うと明日は甘かったりして、そのときの気持の生理次第で狂ってきちゃうんだよ。だから駄目」と語られていました。この板前の世界も、もう男だけの世界ではないでしょう。ついこの間の事ですのに……。池波さんのような舌を持たない人達が多くなったということもあるかも知れませんが、それ以上のことがあるように思

います。とに角、今や女に出来ない仕事はなくなつて了つたと云つていいでしょう。相対的に男が弱くなったこと、理の当然なのかも知れません。この傾向は外国にもあるらしく、先日、海外ニュースが、フランスでは男が駄目になつてきたので、これを支援する法律が出来たと伝えていました。どんな法律なのか聞きもしましたが、世の中どんどん変えらつてゆく。女が男を選^{えら}ぶ世の中になる様な気がします。

「女が偉かつた日本の古代」が蘇ってくるかも知れません。結婚も古代の妻問婚を思わせるものになってくるかも知れません。妻問婚は「女の家・女の親」が支えたのですが、現代の妻問婚は「女の力」がこれを支える事になるのでしょうか。経済力のある女性達はじつに勇敢です。

一夫一婦が先々変わるのか。変るとすればどう変わるのか。それはわかりませんが、男女の別の厳しい支那大陸何千年の歴史の中で、唯一の女帝の「政」を牝朝と呼んだ儒、仏のそれは五戒の一つ、人を惑わせるもの、修行を妨げるもの、キリスト教の女は男の肋骨から作られたもの等々、確認してみれば、我が国においては「女に対する態度」が外国とは違つていたことをおわかり頂けると思うのですが、何如でしょう。そして、我が国には宗教的伝承としての「いろいろのみ」があつた、ということをお理解頂けるのではないかと思います。それは儒仏が入ってくる以前、日本列島の我らが祖先には独自の根生いの考え方、倫理・道徳があつたということです。二千年間お世話になり、これからもお世話になる儒仏の恩は十分に感謝しながら、つまり、外国の恩は恩として、我を忘れてはいけません。「男尊女卑」は我が道にあらざということを我々は確認したいと思います。

× × ×

「いろいろのみ」の本意から源氏を見る

折口先生のおっしゃることは先生の「古代能力」とも云うべきものから導き出されると考えられます。私如きが気軽に口に出れるとは思っていません。難しいのです。秋山虔氏が『折口信夫全集・第十五巻』の「月報」で次の様に云つておられます。

「折口氏の文章を読みすすめてゆけば、私のそれをも含めて、凡百の論議の虚しさをおのずと実感させられてくる。(中略) 折口信夫氏は、この世に、このような精神がありえたのかと思わせられるような、まことに恐るべき人であるといえよう。それだけに、その文学の本当の意味において、氏は孤独な存在であつたといえよう。例えば、この巻がノート編の源氏物語であることにちなんと思ひあわされるのだが、現在百名

余の人々の執筆している全九巻の「源氏物語講座」が刊行されつつある。『主題と方法』『成立と構想』『各巻と人物』『思想と背景』『作者と時代』『表現・文法・語法』『諸本・源泉・影響・研究史』等々の称をもつ各巻から成るこの講座には、おそらく現在の源氏物語研究のあらゆる領域にわたる問題が集約整理されることになるであろう。が、折口信夫氏の源氏学はこのような講座の世界にどう滲透しているのだろうか。おそらく一、二の例外をのぞいて、ここに折口学が受容されることはない、ほぼ断定的に予想しうるのである。何と不幸なことであろうか、折口氏が不幸なのではない。現在の源氏物語研究が殷盛でありつつ、不幸な状況にあるということなのである」

ここで秋山氏の云って居られる「講座」とは、昭和四十六年に刊行された有精堂出版のものであると思いますが、この「月報」も四十六年のものです。もう四十年近く前の文章ですが、秋山氏が指摘なすった状況は変わっていないでしょう。秋山氏は「このような精神がありえたのか」「まことに恐るべき人である」と述べ、「一種のいうにいわれぬ畏れ」とか、「多くの文章の非論理的な文体、思考法に対する違和感を私はいつまで経っても自分の中から拭い去ることはできない」と述べられています。折口先生のお説の大切さは感じられるのに違和感がある。つまりわからない、それが現在の研究者たちを遠ざけているとおっしゃるのです。秋山氏ほどの人がこのようにおっしゃる折口学ですから、私如きにわかるとは思わないのですが、折口先生が大学の大先輩であるという、いわば身内の甘え、更には岡野先生という最大の解説者がいらつしやるおかげで、折口先生の「いろいろのみ」がよくわかるような気がするのです。それは折口先生には「古代がおわかりになる」とわたしは信じているからであろうと思います。

「古代がわかる、感じられるなどというのは傲慢というものだ。わかるわけがない」と西郷信綱氏がおっしゃって居られるのを読んだ記憶があります。西郷氏は本居翁についても、古事記伝四十四巻卒業の時に、「ふるごとの ふみらを読めば いにしへの 手ぶり」といふ 手にとるごとし」と詠まれたのを「古代の人の手振り言問いなどわかる筈がない」とも云っておられます。西郷氏も亦、秋山氏と同じような感じをもって居られることだろうと思います。皆様は如何でしょう。

「いろいろのみ」の物指をあてて源氏物語を読むと「不倫」という文字は消えてなくなります。ということは、「源氏物語理解」の難所を乗り越えることが出来るということになると思います。

源氏物語の不幸の一つは「誨淫の書」などという汚名を背負わされたことです。平成の今では「ポルノ」「源氏の君はプレイボーイ」「女の敵」ということ。「源氏物語」そのものは高く評価しているが「源氏の君」には好感は持てない、という人はかなり居られる。その代表的な人にかの大谷崎・谷崎潤一郎氏が居られます。

谷崎潤一郎の「源氏らしい」

先日もある座談会で高名なお方が「谷崎さんも源氏はきらいといっていますね」と発言して居られました。何故おきらいなのか語られませんでした。出席の皆さん、何故かわかりなのだろうと思います。お嫌いだったという話はかなり広まっています。私も以前から聞いていましたが、何故なのか知らなかった。調べれば良いのですが、怠け者なので調べずに今日に至りました。谷崎氏ほどのお方が「きらい！」とおっしゃれば「やつぱりね」と肯く方が大勢出る。「源氏物語」の為に何とも残念なことに思いました。今回こちらへ何うについて二、三調べ物をしていて、それがわかりました。先ほど御紹介しました有精堂の講座の中で秋山氏が教えて下さいました。谷崎氏といえば、昭和十四年から三年間、他のお仕事は何もなさらずばかりきりで、あの今や「古典」になったともいわれる口語訳を出された方です。敗戦後も新釈が昭和二十六年、新新釈が三十九年と三回も口語訳をして居られます。

折口信夫全集ノート編の慶応義塾の先生方との座談会の中で、小島政二郎氏が「昔から谷崎さんは好きでしたね。昔、芥川さんと谷崎さんと源氏の議論をしているのを傍で聞いていた事があります。谷崎さんが帰ったあとで、芥川さんが『潤公は本当に全部読んでいるからね。僕ときたらほとんど読んでいないのだから。読んでいないで相手をするのだから今日ぐらい疲れた事はない』と云っていました」と。ついでに「漱石は『興味がない』と云っていた。芥川さんは『僕は嫌だね。あんな食い物の乏しい、あんな迷信の強い時代は。真っ平だね。』なんていっていました」と披露して居られます。

芥川氏が亡くなったのは昭和二年だったとおもいますから、これは大正の十年代のことでしょうか。谷崎氏は折口先生より一才年長の明治十九年生まれでいらつしやるから、三十代後半ということになるでしょう。「細雪」をはじめ谷崎氏は「源氏」の影響をかなり受けていると云われておいでになる。その谷崎氏が何故源氏の君を嫌いなさるのか。秋山氏は『源氏物語講座・第三巻』の中で、次のように述べられております。

「私は以前に、谷崎潤一郎氏のにくまれ口という光源氏論（婦人公論昭和四・九）をとりあげて、私見を述べたことがある。そのエッセイはかなり重要な問題を提起して

いると思えるので、なおここで要点をくり返したい。谷崎氏はまずハーバード大学のヒベツト氏の『アメリカの学生の間においては光源氏という主人公は不人気である』という談話を紹介し、そのことは日本でも同様だろうとする。以下、氏自身の光源氏批判が語られるが、その例として、光源氏が空蟬にいい寄る時の誠しやかなることばをとり出し、さらにまた軒端萩とはからずも縁を結ぶかれの言葉や心理を俎上にのせて、そういう恋のいたずらはだれでもありがちで、貴族の青年であつてみれば深くとがめ立てするに及ばぬとしても、しかしながら、かれの場合、藤壺という重大な女性と恋しながら、ふとした出来心で行きずりの女を言葉巧みにくどく、それは藤壺をはなだしく侮辱することになる。源氏物語の作者はそんな光源氏をこの上もなく最上にして理想の男性に仕立てあげているつもりらしいが、私はこういう変に如才ないところが氣にくわないという。このように光源氏の女性関係を糾弾する谷崎氏は、『もののあはれ』を主眼とする源氏物語に対して、儒学者の言うように是非善悪の区別をもつて臨むのは間違いであろうが、しかし、光源氏の恋愛遍歴のやり方は、どういう物指しをもつてきても感心するわけにはいかない、ということをくり返している」

この谷崎氏のお話の「日本でも同様」について、秋山氏も亦同感の意を示しておられて、源氏の君ざらいはかなり多い様です。この辺りを本居翁に聞いてみましょう。

「答へて曰く、これは昔の風議と今の風議と変るゆゑに、今の風議もて手本として見るゆゑにみだりもろこしがはしく聞ゆるなり。もろこし唐は唐の風議、わが国はわが国の風議、昔は昔の風議、今は今の風議あれば、一偏にはいひがたし。ひとかたいづれが是ともいづれが非とも、きはめていひがたきことなり。しかるに儒者は唐の風議を是としてこの風議をそしり、今の人は今の風議になれて昔の風議を怪しむ。これみな偏見なり。」（紫文要領）

「皇国は皇国、今は今、むかしはむかしなるを、儒者などはひたぶるにもろこしもろこしの国俗を本として物をさだめ、今の人は今のならはしになれて昔をあやしむ。すべてその時のならひをしるべきこと、物語を見る一つの心得なり」（玉の小櫛・巻二）

「すべて其の時のならひをよくしるべきこと、物語を見る一つの心得なり」とは誠に誠にその通りその通りと私どもは納得するのですが、そうは思わない人が世の中には多いようです。これは源氏物語に限らず、今の世相一般についても云えることで、自分の国の昔を批判・告発する人達にも見られる様に思います。源氏物語の時代と今とは婚姻の姿が

違います。その時代背景を考えることは大切なことだと思います。「儒者などはひたぶるにもろこしのくにぶりを本として物をさだめ」る、というのも、そういう人が平成の今日そこから中においでになるように思います。一夫一婦の国に居て、一夫多婦を批判するようなもの、と云えば一寸違いますか？ それはそれとして、物書き、それも大谷崎と云われる人が「儒学者の云うように是非善悪の区別をもって臨むのは間違い」と云いながら、光源氏は嫌い、と云われるのはどういうわけなのか。谷崎氏又昔（平安時代）の話を今の話として受けとって居られる。私の様に昔の物指をあててみてすぐ理解してう方が非常識？ おかしいのか？ と思ってもみます。儒仏によって培われ出来上がった常識の壁を思います。谷崎氏は折口先生より一才年上、明治十九年の生まれ、言わば同時代の者ですが、谷崎氏の視野に折口先生は入っていなかった。本居翁も遠くにあった？ もしかすると谷崎氏には「古代」がなかった？ とそんな恐れ多いことを、ふと思います。

小島氏の「漱石も嫌いだった」の語に、では親しかったあの正岡氏はどうだったのか、とその三大随筆（「墨汁一滴」「仰臥漫録」「病床六尺』『子規全集』KK増進会出版社）を読んでみましたら、「墨汁一滴」に三例「源氏物語」の語が見えました。その一は籠の七草の赤蕪を見て「源語の趣か」と云って居られるのと、あと二例は言葉づかいを云って居られる、それだけでした。批評はして居られない。が、読んで居られたことは間違いのないように感じたことでした。

しかし、この選集の解説をなすった長谷川權氏の「日本人は古くから唯一の絶対の神を認めず、この世のさまざまな現象そのものに八百万の神々の姿を見てきた。唯一神の約束する永遠の幸福よりも一輪の花に救いを見出した。たとえ絶対を名乗る神が現れても曖昧模糊たる霞の中に溶かしこんだ。子規の思想は山川草木に神を認め、鳥・獣・虫・魚に救いを見出す日本人の、こうした宇宙観の現れの一つだろう」と述べて居られるのに心魅かれました。正岡氏は日本の古代を意識して居られた。この正岡氏が折口先生に会われたら？ と強く思ったことでした。正岡氏の源氏物語論が語られていたら、谷崎氏が（氏は折口先生と同時代の方でいらしたのだから）と、とりとめのないことを考えて了います。そして、なるべく多くの人にこの「いろいろこのみ」の物指を持っていたきたいと思います。

× × ×

おわりに

今日のお話もそろそろ終りにしなければなりません。三矢先生が逝かれて一月半後、あの大地震が起こります。この大震災が源氏物語の研究に大きな変化を与えたと、伊賀氏は

述べて居られます。「大正十二年、関東大震災で多くの貴重な文献が失われたが、これはかえって文献学的研究、テキスト研究を盛んにする結果となった。大正十四年、雑誌『国語と国文』は源氏物語の特集号を出し、源氏研究のさまざまな分野の論文二十二編を収めたが、研究史資料の分野で松井簡治・佐々木信綱・橋本進吉・吉野村八良・山岸徳平・植松安などの研究が発表されている。池田亀鑑は芳賀博士記念会の嘱託を受けて、大正十五年から注釈編述の仕事をはじめ、次いで諸注集成、更に本文調査へと研究の中心を変更し、昭和七年に完成した」と。

三矢先生の源氏物語全講会は今日の源氏物語研究の先駆けをなさった、と云って良いと思います。泉下の先生に御報告申し上げる次第です。

源氏物語を（一つの作品を）どう読もうと、どう考えようと他人が嘴を入れ、どうなるものでもありませんが、本居翁のおっしゃる「物語の心得」は大切なものだと思います。

× × ×

今日、私は、私の源氏物語を読む為の物指、三本をご披露しました。（この物指と云う言葉が気に入っていたのですが、大谷崎氏も使っていたのを知って嬉しくなりました）

三矢先生の「やまとだましひ」と云う物指、

本居翁の「もののあはれを知る心」と云う物指、

折口先生の「いろごのみ」と云う物指、

この三本に加えて誰方から教えて頂いたのだらうと思うのですが「自分以外の人生を体験させてくれるもの」と云う物指、この三本、いや、四本の物指を使って読みすすむ時、源氏物語はさらにさらに面白くなる、特に、ポルノだの、プレイボーイだの、棘を感じないで読めるように思います。

この三本の「物指」を手にする時、私の胸を去来するのは「國學」と云う語です。「國學は文芸復興の学なのだ」と云う思いです。そして「國學」で源氏物語を読んでみて下さいと申し上げたいのです。

× × ×

最後にもう一本、折口先生の「反省の文学源氏物語」という物指を御紹介申し上げ、「幻」

の最後の処を一寸読ませて頂いて今日の話を終らせて頂きます。

「我々はこの物語から、人間が大きな苦しみに耐へ通してゆく姿と人間として向上してゆく過程を学ばなければならぬ。源氏物語は中世に於ける日本人の最も深い反省を書いた反省の書だと云ふことが出来るのである」

「幻」今年をばかく過ぐしつれば……

死出の山こえにし人を慕ふとて

あとを見つつもなほ惑ふかな

かきつめて見るもかひなしもしほ草

おなじ雲居の煙とをなれ

春までの命も知らず雪のうちに

色づく梅をけふかざしてむ

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに

年もわが世もけふやつきぬる

ついたちの程のこと、常よりことなるべく、とおきてさせ給ふ。親王たち大臣の御引出物、しなじなの祿どもなど、二なう思し設けてとぞ。

× × ×

有難うございました。